

西郷町運動公園整備事業に伴う  
大城遺跡発掘調査報告書

平成11年3月

西郷町文化振興財団  
隱岐島後教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、西郷町文化振興財団と隱岐島後教育委員会が、平成10年度に実施した大城遺跡の発掘調査の報告書です。

### 2. 調査組織

調査主体	上田克己	隠岐島後教育委員会教育長
事務局	浜崎倫也	西郷町文化振興財団
調査指導	島根県教育庁文化財課及び島根県埋蔵文化財調査センター	
	野津徳重	隠岐島後文化財保護審議会委員
調査員	横田 登	隠岐島後教育委員会社会教育課文化振興係長
調査補助員	福島 宏	隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員
	下川智史	隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員

3. 現場における発掘作業及び遺物整理作業に参加、その他調査の実施に御協力頂いた下記の方々の名を記し、感謝の意を表します。

(敬称略)

滝下好一	岩山和宏	清水和雄	原 裕教	下澤 収	根本八重子	村上礼子
川上秀親	但馬 保	永海大輔	岩山勝治	古林和子	吉崎英一郎	伊勢宗高
古林誠一	坂本 工	村上広美	脇田勇人	村上亮介	秋鹿亮太	森口拓郎
岡本明久						

4. 本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の指導、助言を得ながら、横田、野津研吾（隠岐島後教育委員会臨時職員）が行いました。

5. 掘図中の矢印は真北を指します。なお、西郷における磁気偏角度は、N-7°00'-Eです。

6. 本書中の高さはすべて海拔高で表示しております。

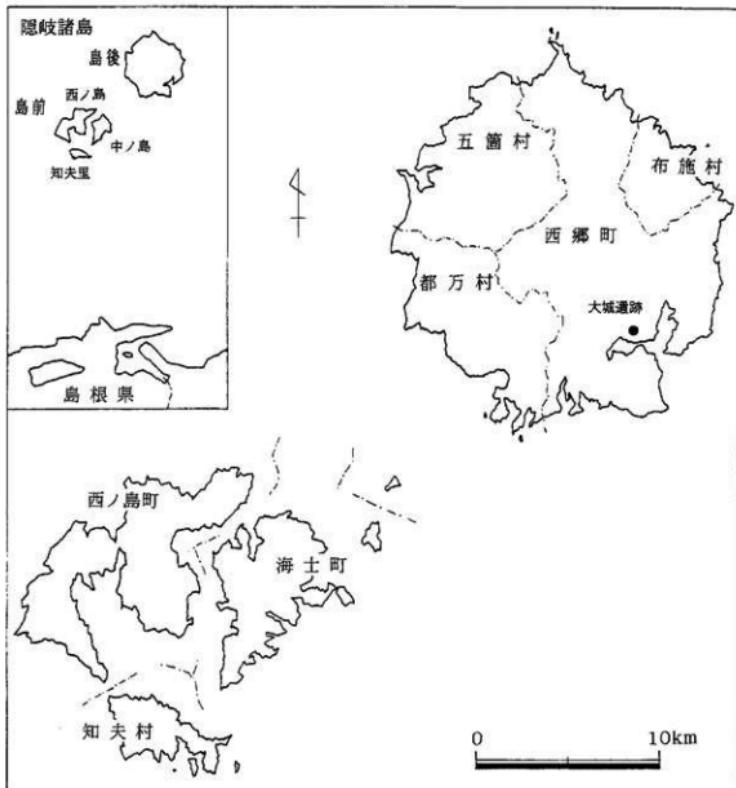
## 目 次

1 調査の経過	1
2 位置と環境	2
3 調査の概要	4
4 造構と遺物	5
5 おわりに	8

## 1 調査の経過

大城遺跡は、昭和40年頃、地元の郷土史家、故藤田一枝氏が発見した遺跡です。当時、この地においてグラウンド建設の計画があり、土地を造成している時に弥生式土器が見つかったものです。造成中ということで、遺構の検出はできなかったようですが、氏は、これら土器片を採集し、一部復原したところその中の一つに口縁部肩のところに3個の小口を付け、水鳥のスタンプ文を施した壺がありました。

それ以降、当地は大城遺跡として、特に開発されることもなくましたが、近年になりこのグラウンドを含めた周辺一帯が、運動公園として整備されることになりました。このため事業予定地全域に26ヶ所のトレーニングを設定し、平成10年7月から試掘調査を実施しました。その結果、スタンプ施文土器出土地点から南方約200mのところで、弥生式土器片と石組造構が検出されました。この結果を基に、引き続き本発掘調査を実施したものです。



第1図 大城遺跡位置図

## 2 位置と環境

大城遺跡は、隱岐諸島の中の島後と呼ばれる島にあり、島根県隱岐郡西郷町に所在します。

隱岐諸島は、島根半島の北方沖合50～80kmに散在する4つの住民島と、大小 180余の無人島からなっています。4つの住民島は大別して島前、島後と呼ばれ、南西部に位置する島前は西ノ島、知夫里島、中ノ島の3島の総称です。島後というものは島後一島の呼称で西郷町、布施村、五箇村、都万村の1町3村で構成されています。島後は、群島中最大の面積(243㎢)をもち、ほぼ円形に近い形をしていますが、島の南東部、北西部にそれぞれ西郷湾、重栖湾が切り込みをつけており、天然の良港となっています。

島の地勢をみると、最高峰大満寺山(808m)を中心とする山地は起伏がはげしく、それらが海岸まで続いている断崖絶壁の海岸線を作っています。その中で、北西部の五箇村、北部の西郷町中村、南部の西郷町平、南西部の都万村にはまとまった平地があります。中でも西郷湾に流れ込む隱岐最長の八尾川の形成した八尾平野(西郷町平)は、隱岐最大の穀倉地帯といえます。大城遺跡は、この八尾川の河口付近、標高約30mの丘陵尾根上に位置しています。北側には、島の主峰大満寺山を望み、南側は西郷湾を見ることができます。

この大城遺跡の周辺の遺跡についてみると、旧石器時代の遺跡として東船遺跡(西郷町今津)があります。西郷湾内周辺の遺跡が多い中で、この遺跡は外海に面していて、黒曜石の細石刃核が出土しています。中国地方で黒曜石を産出するのは隱岐島だけ、中国地方の各遺跡からも出土しています。大陸との関わりも深く、ロシアのウラジオストック周辺の遺跡(約1万8千年前)からも隱岐産の黒曜石が検出されています。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが西郷湾内沿岸部に所在しています。前期を中心とする遺跡として宮尾遺跡(西郷町東郷)が、西郷湾の東湾ともいいくべき奥の小半島部に位置しています。時代が下るにつれて西方への移動が見られ、前期末から後期にかけての下西海岸遺跡(西郷町下西)、後期を中心とするくだりま遺跡(西郷町下西)などがあります。宮尾遺跡では条痕文土器や爪形文土器が見つかっていますが、この条痕文土器は本土山陰側の佐土講式に比定されるように、他の遺跡の縄文土器も、器形・文様等本土側と良く似た歩みが見られます。このことは、前述のように、黒曜石を媒介とした交流を裏付けるものと言えます。

弥生時代の遺跡は、現在までのところ非常に発見例が少ない状況ですが、そうした中でこの大城遺跡から500～600m上流の八田橋付近で月無遺跡(西郷町八田)が河川改修工事中に見つかっています。遺構面は河床から2m下に位置し、土器片、石斧、石包丁と共に木製農耕具も見つかっています。

古墳時代に入ると、前期の古墳はまだ見つかっていませんが、中期から後期にかけての古墳が八尾平野の西側と南側の丘陵地帯に集中しています。早い時期の古墳としては斎京谷古墳群(西郷町下西)があります。5世紀代の円墳で径約25m、鉄直刀・鉄鎌等が出土しています。6世紀に入ると、小円墳が多数築かれるようになり、また前方後円墳も造られるようになってきます。島後最大の前方後円墳としては、八尾平野の西側に平神社古墳(西郷町平)があります。全長47m、後円部径約28m、高さ5mの墳丘をもち、くびれ部には横穴式石室が開口しています。7世紀代には横穴式古墳も多数造られるようになります。

以上、旧石器時代から古墳時代にかけて簡単に概要を述べてきましたが、奈良朝以降についても、八尾平野に条里制も確認されており、八尾平野の北側丘陵には国分寺・国分尼寺跡が所在し、離島とはいえ中央とほぼ同じ歴史の歩みをみせているといえます。



第2図 大城遺跡周辺の遺跡分布図

1. 船ヶ谷古墳
2. 向田古墳群
3. 麓岐園分寺
4. 野中西遺跡
5. 麓岐園分尼寺跡
6. 野中東遺跡
7. 尼寺原遺跡
8. 大光寺跡
9. 宮田城跡
10. 水産高校西側横穴
11. 小田古墳
12. 飯田小学校裏古墳
13. 本先古墳
14. 平神社古墳
15. 平西古墳
16. 平東古墳群
17. 子安神社古墳
18. 中山古墳群
19. 中山遺跡
20. 八尾川流域条里制遺跡
21. 月照遺跡
22. 名田古墳群
23. 神糸古墳群
24. 小田西光寺古墳
25. 神糸遺跡
26. 宮尾遺跡
27. 宮尾古墳群
28. 津井古墳群
29. 津井古海岸遺跡
30. ヒノメサン古墳群
31. 下西御崎神社古墳群
32. 御寺古墳
33. 御得寺跡
34. 五若御命神社古墳群
35. 神殿古墳群
36. 五若御命神社境内古墳群
37. 備後氏宅裏山古墳
38. 宮人前古墳
39. ハサコ古墳群
40. 高京谷南古墳群
41. 高京谷古墳群
42. 田井古墳
43. 能木原古墳群
44. 能木原遺跡
45. 甲ノ原遺跡
46. 大将軍遺跡
47. 甲ノ原古墳群
48. 白斐古墳群
49. 下西海岸遺跡
50. 国府鬼城跡
51. 老木遺跡
52. 西郷小学校古墳群
53. 大川神社古墳
54. 登眞トンネル遺跡
55. へぎ塙
56. へ半遺跡
57. 清久寺裏遺跡
58. 半崎背穴
59. 西郷公園古墳
60. 碓中华城古墳
61. 大庄古墳群
62. くだりま遺跡
63. 高井古墳
64. 鯨の山複穴群
65. 奥田遺跡
66. 森遺跡
67. 東船遺跡
68. 國司塚古墳
69. 大床遺跡
70. 街崎谷II遺跡
71. 街崎谷I遺跡

### 3 調査の概要

#### [試掘調査]

対象地に26ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施しました。総面積 402m<sup>2</sup>。その結果、南側5ヶ所のトレンチで、遺構・遺物が検出されました。遺物は弥生の土器片と谷部において、近世の備前焼きの小片が出しました。遺構は、弥生墳墓に関係すると思われる石組遺構です。

#### [本調査]

試掘調査で、土器片及び石組遺構が検出された尾根筋とその北側の谷の部分を中心に調査を実施しました。尾根筋の表土層は薄く、10~30cmで地山面になります。試掘調査で検出された石組遺構の周囲について、さらに西側に調査範囲を広げて発掘調査を実施し、四隅突出型埴丘墓を1基検出することができました。

谷部については、表土もかなり深いものでしたが、特に遺構・遺物は検出されませんでした。調査総面積は約 2,800m<sup>2</sup>となります。



第3図 調査区実測図

## 4 遺構と遺物

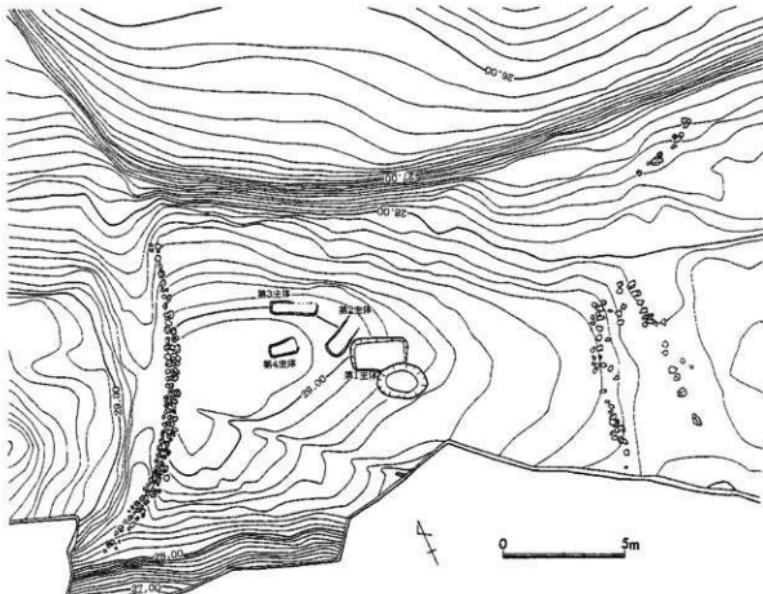
### I 遺構

#### 四隅突出型墳丘墓

墳丘墓は、ほぼ東西に延びる丘陵尾根上に造られています。尾根の東側・西側の2ヶ所を縱断する形で溝を切り、地山を整形し、さらに東側については、盛土を施し墳丘を築いています。北側・南側は、ほとんど自然地形を利用して造られたと思われますが、北側については畠地造成等により残存状況は悪く、南側についても非常に急斜面で、崩落等により一部しか残っていません。

墳丘西側斜面には、丸みを帯びた人頭大より少し小さめの川原石が規則正しく貼り付けられ、端に行くほど緩やかにカーブし、突出部を形成しています。東側はかなり削平を受け、溝の遺存状態も悪く、崩れ落ちた石が散在しています。北側・南側にも同様に貼り石があったと思われますが、調査では検出されませんでした。前述のように、北側については畠地造成・耕作等により取り除かれ、南側については、急斜面のため早い時期に崩れ落ちたものと思われます。

墳丘の大きさは、長辺（東西方向）が突出部を除いて約18m、突出部をいれると20m以上の規模になります。短辺（南北）は不明ですが、残存状況・地形等から考えると10~12mと推定され、かなりの長方形となります。墳丘南側斜面の貼り石をイメージすると、南方の八尾川河口、西郷湾辺りの低地から見上げることを意識した造りと考えられます。



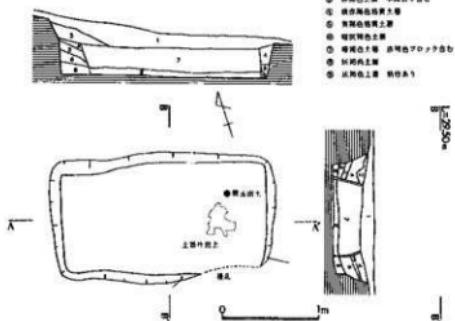
第4図 四隅突出型墳丘墓実測図

貼り石についてみると、西側斜面が遺存状況が良く、縦列・横列を意識した規則正しい配列となっています。斜面を石で埋め尽くすという感じではなく、同程度の大きさの石を選んで並べられています。良く残っているところで縦に4段ありますが、この斜面を形成するためにカットされた溝を精査中に、かなりの量の、貼り石が転落したと思われる石が見つかっており、5段程度はあったと思われます。

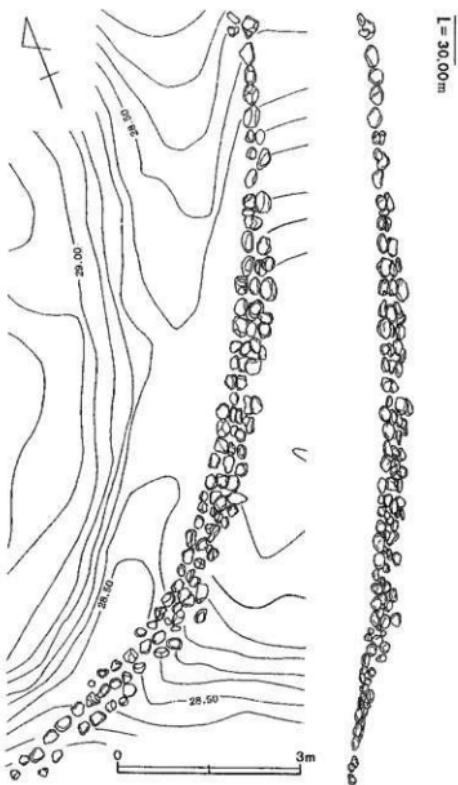
ただ、この貼り石も、斜面最下段には石が無く、中途から貼られている状況です。また、他地域の四隅突出型埴丘墓に見られる列石も、犬走り状の平坦面も調査では確認されず、貼り石が落下しやすいと思われ、不自然な感じを受けます。

突出部については、南西側突出部が良く残っている方ですが、先端部分が失われており、隅の構造・形態は不明です。

$A=22.50m$



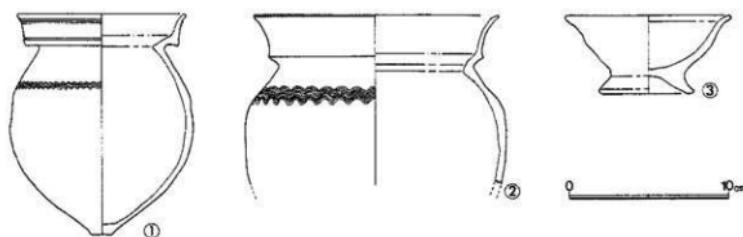
第6図 第1主体部実測図



第5図 西側貼り石実測図

主体部は4つ検出されています。そのうち中心主体と思われるものは、埴丘のほぼ中央で、長辺に沿う方向で検出されています。大きさは130×230cmで残存深さは40~60cm位です。埋土層から組合せ式の木棺の痕跡も確認されました。側板は、土圧のため、上部が内側に倒れ込むようになっていますが80×180cmの大きさです。

## II 遺物



第7図 出土土器実測図 (①=第1主体部 ②=第2主体部 ③=西側溝底部)

出土遺物は量的には多くありませんが、第1・2主体部、西側溝底部、それと墳丘周辺から土器の小片が検出されました。

### 土器

①壺=第1主体部から検出されました。埋納位置は分かりませんが、墓横の底部で、押しつぶされたような状態で出土しました。大きさは、口径10.3cm、底径1.2cmで、高さは13.7cmあります。焼成は良好で、2~3mm程度の砂粒を含んでいます。口縁部外側には平行沈線が施され、上腹部には4条の波状紋が施されています。

②壺=第2主体部から、横に倒れたような状況で出土しました。遺存状態はあまり良くなく、口径は推定復原で15.4cmになります。焼成は良好で、1~2mm程度の砂粒を含んでいます。上腹部には7条の波状紋が施されています。

③壺=西側の溝の底部から検出されたものです。剥落したと思われる貼り石の、石と石の間から見つかったもので、もともとは墳丘上にあったものと思われます。大きさは、口径10.2cm、底径5.9cmで、高さは4.9cmあります。少し肉厚ですが、焼成は良く、1~2mm程度の砂粒を含んでいます。

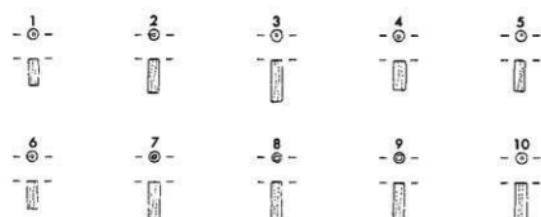
### 管玉

第1主体部から10個検出されました。碧玉製で、非常に丁寧に研磨されています。碧玉は当地には産地がなく、製品として本土から持ち込まれたものと思われます。

管玉観察表

No	長さ	径
1	1.1	0.45
2	1.4	0.38
3	1.7	0.40
4	1.2	0.50
5	1.3	0.38
6	1.1	0.35
7	1.5	0.40
8	1.5	0.39
9	1.5	0.39
10	1.6	0.45

単位=cm



第8図 管玉実測図

## 5 おわりに

今回の調査では、隱岐島で初めての弥生時代の墳墓が見つかりました。当地においては、弥生時代の遺跡は発見例が少なく、次の古墳時代前期にかけて空白の時代とまで言わされていました。この四隅突出型墳丘墓の発見は、間違いなく本土との交流を裏付けるもので、隱岐の弥生時代を解明するうえで重要なものといえます。今後さらに発見が続くことも考えられ、1基だけで隱岐の四隅突出型墳丘墓の特性を語ることはできませんが、ここでは、この大城の四隅突出型墳丘墓の特徴をあげて、まとめにかえたいと思います。

立地について見ると、丘陵尾根筋に立地しており、発生期の中国山間地の四隅突出型墳丘墓が、丘陵緩斜面に位置しているのに対し、山陰地方のそれと同じといえます。貼り石は、前項で述べたように非常に特徴的と言えます。同じような大きさの石を選び、縦列・横列を意識し、斜面を埋め尽くすというより、マス目状に並べるような配列となっています。斜面最下段には石が無く、犬走り状の平坦面も検出されませんでした。また、列石も無く、このことは同じ山陰でも伯耆に類似した形と言えます。

突出部については、斜面貼り石が連続して並んでいますが、下段の石列を順次減らし、上段の石の高さを下げるにより、隅の平面形を造り斜面を造っていると思われます。隅の全体的な構造は不明ですが、この構方はあまり類例のないものと言えます。

以上、簡単に特徴を述べてきましたが、今後さらに他地域との比較検討を加えることにより、弥生時代の特徴的な墳墓の一つである中国山間地発生とされる四隅突出型墳丘墓の、山陰・北陸への分布、展開を研究するうえで、貴重な資料に成りえるといえます。

## 参考文献

隱岐支庁『隱岐島誌』 昭和8年

山本清『隱岐古墳調査報告』 昭和30年

藤田一枝「隱岐島先史時代の遺跡について」 『隱岐郷土研究』 第2号所収 昭和32年

勝部明生「斉京谷古墳」 関西大学島根大学共同隱岐調査会編『隱岐』 所収 昭和43年

田中豊治「隱岐島の歴史地理学的研究」 昭和54年

吉川正「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」 島根考古学会『島根考古学会誌』 第15集所収 1998年

調査地遠景



南から

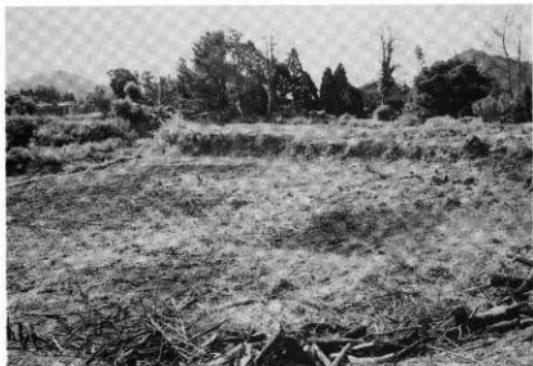


南西から



北西から

調査前の状況



北側谷部から丘陵を見る



人が立っている辺りが墳丘墓東端



墳丘墓中央辺りから東を見る

調査風景



表土除去後の状況



東から



西から

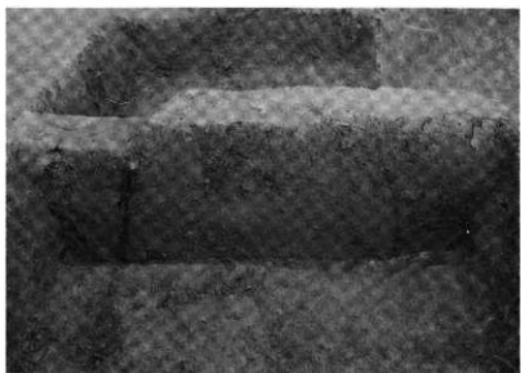
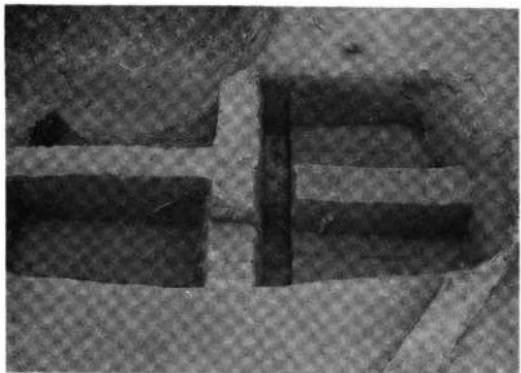


西から

西側貼り石の調査状況



第1主体部調査状況



黒く見えるのが木棺側板



第1主体部調査状況



黒く見えるのが木棺側板



土器の検出状況



完掘後

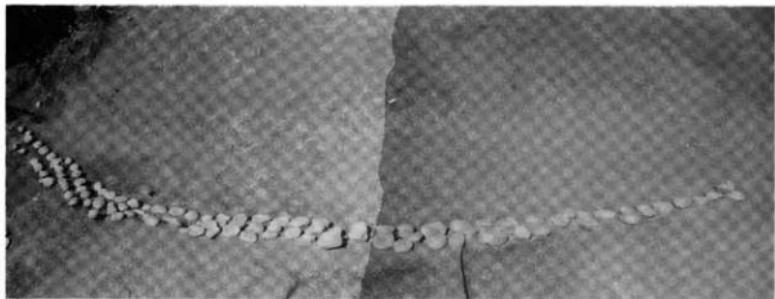
貼り石の状況



北から



縦横を意識した配列

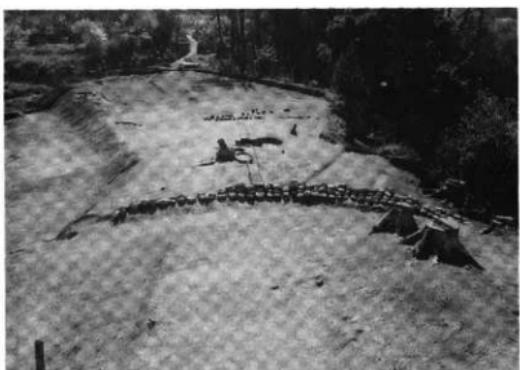


東から

完掘後遠景



北西から

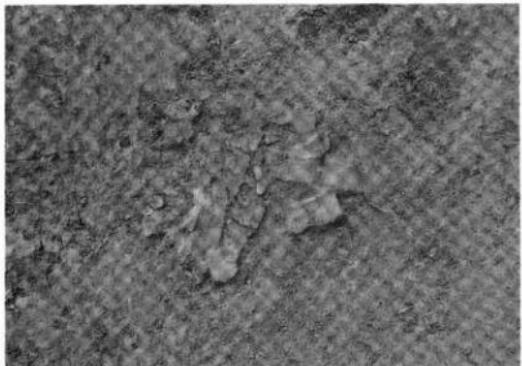


西から

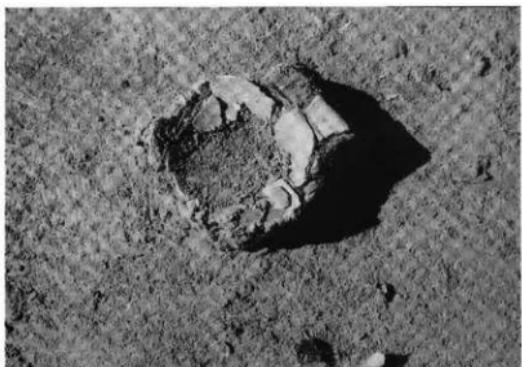


東から

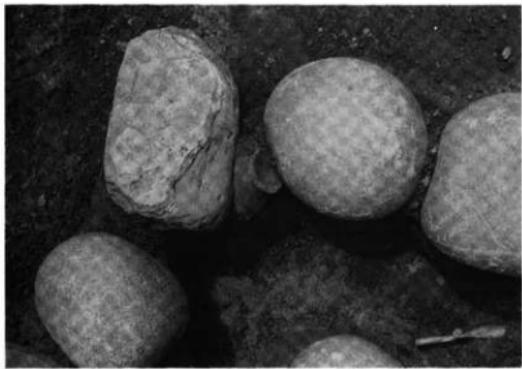
土器出土状况



第1主体部

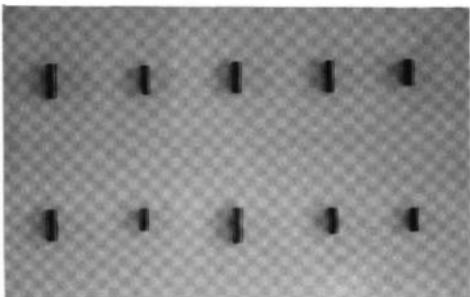


第2主体部



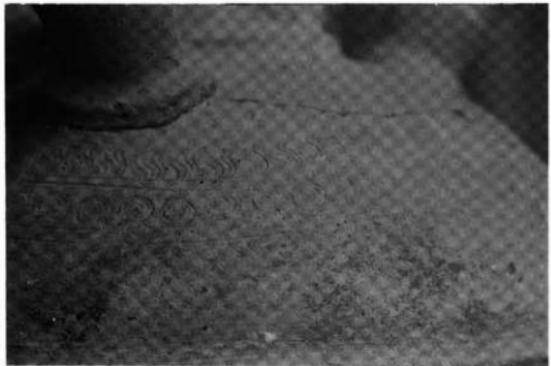
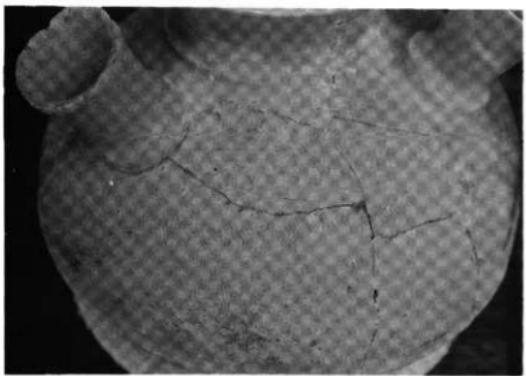
西侧沟底部

出土遺物  
(Noは本文と同じ)



1	2	3	4	5
6	7	8	9	10

スタンプ文土器



現地説明会の状況



# 報告書 抄録

ふりがな	おおしろ い-せきは-くづかう き ほうこくしょ
書名	大城遺跡発掘調査報告書
副書名	西郷町運動公園整備事業に伴う
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	横田登、野津研吾
編集機関	雁岐島後教育委員会
所在地	〒 685-0014 島根県隱岐郡西郷町大字西町字八星の一, 58 Tel 08512-2-2126
発行年月日	1999年3月

所収遺跡名	所在地	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	度	分			
大城遺跡	島根県隱岐郡西郷町大字西町字吉田	しまねけん おきぐん せいじょうまち おおじ よしだ	32521	36度 12分 22秒	133度 19分 41秒	19980606 ↓ 19990330	2,800	運動公園整備 事業に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大城遺跡	墳墓	弥生時代	四隅突出型墳丘墓1基	弥生土器 菅玉	隠岐島で初の弥生墳墓

西郷町運動公園整備事業に伴う  
大城遺跡発掘調査報告書

---

編集 開岐島後教育委員会

岐阜県西郷町西町八尾の一、58

発行 平成11年3月

印刷 中西印刷所

岐阜県西郷町城北町270